

# イラン・ヴァルザネに生きる人々の生態史 —ザーヤンデルード下流域における生業を通じた重層的な資源管理と利用—

西川 優花

ユーラシア乾燥地帯では、1999年-2002年にかけて大規模な旱魃が生じ、それにより各国において甚大な被害が生じた。本研究で対象とするイランにおいても、その旱魃を起点として、環境移民の発生や農業従事者の失業、それに留まらず都市における水不足や水質悪化など水をめぐる様々な問題が噴出してきており、いまや水の問題は国家の安全保障をも揺るがす最重要課題として位置付けられている。本研究で対象としたザーヤンデルード川最下流に位置するヴァルザネも、特に2000年以降、現在に至るまでのおよそ20年にわたり旱魃の問題に苛まれ続け、人々は対応を迫られてきた。

イランでは特に1979年のイラン・イスラム革命、1980-1989年のイラン・イラク戦争、2003年の対イラン経済制裁の発動により、特に地方に位置する農村や都市における人々の生活や生業をめぐる実情を知ることのできるデータや研究が顕著に不足している状況にある。それにも関わらず、限られたデータや事例をもとに、現在イランに差し迫っている水をめぐる問題に対処をしようとしているのが現状であり、今一度、人びとの生業と生活の側から旱魃を捉え、その対策について検討してゆく研究が求められている。

以上のような背景から、本研究では、イラン中央高原を貫流する内陸河川ザーヤンデルードの最下流に位置するヴァルザネという地域に生きる人々を対象とし、そこに生きる・生きた人々の語りから生態史—ある社会・人間の空間や自然に対する関係の通時的記録(秋道 2011)—を作成することを通じて、ヴァルザネという乾燥地に存在する農村地域に生きる人々の生活史を、歴史・社会・生態的文脈に再配置しながら通時的に解釈してゆくことを試みた。

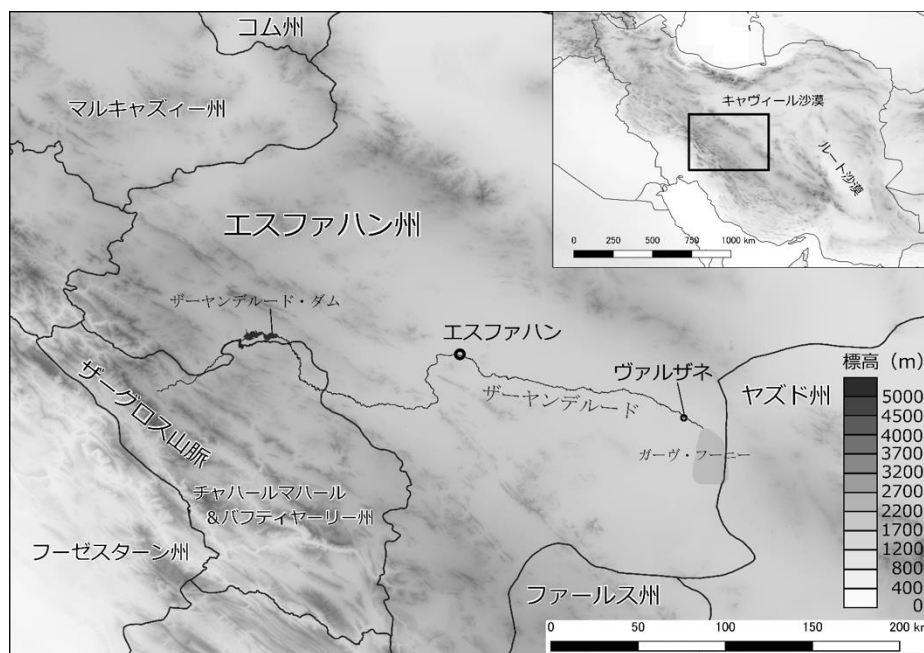


図1. エスファハン州を貫流するザーヤンデルードとヴァルザネの位置

(注: CGIAR-CSI SRTM 90m DEM Digital Elevation Database を使用して利用)

つまり本研究では、通時性を重視し、ヴァルザネというマイクロな環境における人間と自然との関わりの来し方について焦点を当てつつ、この関わりの応答としての生態史を、さらに国家や国際社会といった枠組

みに目配せしつつ位置づけなおすことを射程とした。また、イラン農村地域におけるミクロの事例に基づく研究の空白を克服すべく、本研究では、現在の時空における生業と生活を把握するための参与観察をはじめとする質的調査のみならず、ライフヒストリー調査を行なった。それにより、上述のような空白を補完し、現在のイラン農村に生きる人々の営みを、これまでのイラン農村研究の蓄積に接続させることを試みた。また、本研究の目指す生態史は、自然・人間・社会との関わりの応答を客観的な事実の痕跡として記録し分析してゆくことを目指すものではなく、イラン農村研究の開拓者である大野(1969 年)などが模索し続けた農民理解を、現代イランの時空において達成しようとしたものである。

以上の視座を踏まえ、第3章では、本研究において対象とするヴァルザネが属する水系である内陸河川ザーヤンデルードについて、河川の歴史的な利用と開発について整理を行い、ザーヤンデルードをめぐって歴史的に水分配をめぐる権力の恣意性と抗議活動とが存在してきたことを確認したことで、本研究において主眼とするヴァルザネを流域全体のなかで捉え直した。河川上流域と対比させたことにより、周縁化されて来た存在として下流域の存在が浮かび上がって来た。その上で、ヴァルザネが2000年以降苛まれている長期的な旱魃の影響について、現地調査の結果をもとに特に基盤生業である農業について整理したところ、河川からの配水が激減しており、地下水位の急激な低下を招いていることが明らかになった。

第4章では、第3章にて整理を行なった流域の開発と利用との歴史的経緯を踏まえつつ、本稿の冒頭で「もともと私たちのものである」と古老が述べたザーヤンデルードの水利権をめぐる所有論について、これまで先行研究で報告されてきたカナート灌漑の農村の事例と河川灌漑の農村とを対比・援用させながら分析を行った。河川灌漑の農村における所有論を踏まえ、内陸河川であるザーヤンデルードがこれまで誰のものとしてきたのかを明らかにした。特にヴァルザネを含む最下流の配水地区における水分配の論理について分析を行った結果、ザーヤンデルードをめぐっては、河川全体を共有物として扱う視点と、流域に存在するそれぞれの受益村内における水利権者達とその村内において共有物として扱う視点が闘ぎ合って存在することが明らかになり、その視点の重なり合いと、流域全体における所有論の連なりを描き出す重要性が確認された。また、ヴァルザネにおける水利慣行が河川の性質と不可分であるために、カナート灌漑の農村と比して固有な状況とも言いうる、共同性の継承の現状が導かれた。その上で、ヴァルザネにおいて水が「共有物」として扱われるその理由について分析を行ったが、その共的实践の要となるミーラーブ(水番)に着目し、その役割と機能を明らかにすることで、ミーラーブを通じて共同性の確認と継承とが行われていることが見えてきた。

続く第5章では、イラン農村研究において議論の中心に据えて検討されることのなかった生業複合に焦点を当てた。ヴァルザネにおいて観察される諸生業が、そこに生きる一人ひとりによってどのように営まれ、旱魃と乾燥という生態的な条件に歴史的にどのように対応してきたのか、そして2000年以降の長期的な旱魃に対してどのように対応しているのかを、ライフヒストリー調査によって、生業を営む人びとの視点から明らかにした。調査から、ヴァルザネに存在するそれぞれの耕作地の所有の変遷を明らかにした。耕作地の所有の変遷からは、ヴァルザネが1960年代の農地改革の時点ではその政策の影響を受けておらず、むしろ1979年の革命以降、農村聖戦復興隊の活動によって農地の拡大や分配が行われ、当時目された「自立経済」の達成のため、農業を営むことが促進されてきたことが見えてきた。また、かつてのヴァルザネにおける河川とのかかわりが現在に比べて多元的であったことが見えてきた。さらに、2000年以降の長期的旱魃下で、諸生業を複合的に扱い旱魃に対応しようとする人びとの営みが明らかになっただけでなく、それぞれの生業が重層的関係にあり、河川との関わりが現在も多元的であることが導き出された。

第6章では、第4章の河川をめぐる所有論および、第5章において明らかになった河川と生業・生活との歴史的・重層的な関わりを踏まえつつ、さらに踏み込んでヴァルザネの人びとによる旱魃や水利権、河川の水をめぐる認識について分析・解釈を行なった。彼らにとって旱魃とは、何よりも「川から水が来ないこと」であり、旱魃をめぐる意味内容も、時系列が降りるに従って地下水の減少や景観の変化などが加えられて語られた。また、ヴァルザネの人びとが旱魃について説明する際に、明確に理由を説明する場合には常にダムや上流の人びととの対比を持って語られ、その対比の中で規範性が確認されていることも指摘された。さらに、日常の場面において語られる水をめぐる言説と、抗議行動において語られた水利権をめぐる言説とを、ペルシア語に即して精査した。それにより、「私たちの水利権」として表象されるヴァルザネの人びとにとっての水利権の射程を明確にした。彼らにとっての水利権とは、水利権所有者のみでなく、若者や景観などを包摂するものであることが示唆され、その正当性の根拠としてヴァルザネの歴史性のみならず、記憶の限りに存在する河川水を得るために払った犠牲や労力が挙げられた。一方、河川の水をめぐる言説からは、抗議行動を通じて水の問題を解決しようと身を賭す傍ら、究極的には河川に水が来るかどうかについてを、人為・人智を超えたものとして認識する人びとの姿と思想が導き出された。

現在のザーヤンデルドをめぐる長期的な旱魃は、イラン社会全体の人口増加や、生活様式の変更による一人当たりの水消費量の増加など、人為的な要因と降雨量の減少、旱魃年の継続などの自然要因とが絡まり合っている。そのほかにもグローバルなレベルにおける気候変動の影響も指摘されてはいるものの、それらの諸要因について人為と自然とを区別することは不可能であるし無意味でさえある。ヴァルザネの人びとが認識する旱魃の要因とは「ダム」であり「上流域に暮らす人びと」であり、そしてこの「ダム」や「上流域」とは、現代イランにおいて構造的に作り出されてきた権力と差異とを象徴するものであると言え、ヴァルザネにおける長期的な旱魃は、少なくともヴァルザネの人々にとって、人によって作られた旱魃として受け止められていることを指摘できよう。つまり、社会的に構築された苦しみ（Kleinman1997, Farmer1997）がそこには存在すると言える。一方で、ヴァルザネではそのような認識を持ち抗議行動を行いながらも、この旱魃には人為や人智を超えた意味があるとして、その意味を見極めようとしながら今も河川下流域で日々を生活している人びとがいる。この姿勢は、上述の「ダム」や「上流域」を旱魃の要因として理解しようとする姿勢と決して矛盾するものではなく、自然と人間とを対峙させるのでもなく、それらを包摂しながらも人間の行為の因果の先に神智を見極めようとしているものであると推察される。そして、この二つの姿勢の闘ぎ合いのなかにこそ、本研究において捉えようとした「現在のヴァルザネに生きる人びとにとっての生態(=風土)」の姿が現れているのではないだろうかということが示唆された。（環境行動学）